



れんの耳  
(治療編)

かっぱ太郎

## ちいの発病

---

2017年の初夏、れんの相棒でひとつ年上のちいが、急にごはんを食べなくなりました。

緊急入院と手術の必要な病気にかかってしまっていたのです。

入院した日にちいは10歳になりましたが、れんと私たち家族は、ちいの誕生日を祝うこともできませんでした。

翌日の手術のことを考えると、お祝いどころではありません。

ちいは貧血で危険な状態で、手術のあとも何日か入院し、少し元気になって退院しました。

退院したといっても、お腹を切ったあとなので、傷をなめないようプラスチックのエリザベスカラー（保護用の襟巻き）を首に巻いていました。

少し元気が出てきて、いきおい良く歩き回るので、パラボラアンテナのようなカラーでまわりのものをなぎ倒しそうに見えました。

れんは自分がなぎ倒されるのを恐れて、ちいが通ると道を譲ります。まるでライオン様のお通りです。

私たち家族は、ちいを安静にさせようとなだめ、それを見たれんは、自分も静かにしていなければならないのだと知りました。

いつものボール遊びも、なるべく静かに、ちいにぶつかったりしないように気をつけているようでした。

病院で、ちいのパラボラアンテナが外されて家に帰った日、れんは玄関に飛んできて、ちいに抱きつくような仕草でちいを迎えました。まるで、

「ちいちゃん、お帰りなさい！良かったね。」

と、自分のことのように喜んでいるように見えました。

## れんの耳掃除

---

れんは4歳のときの耳の疾患以来、いつも耳の中が少し赤くなっていました。季節によっては、赤みがひどくなり、ジクジクと液体が出てくることもあり、そのたびに薬が必要になりました。

薬で少し良くなっても、週に一度は必ず耳の洗浄のために通院し、家でも朝晩の耳掃除は欠かせませんでした。

初めのうちは耳に触られるのをとても嫌がって、手に噛み付こうとしました。噛み付くといっても、れんの場合、歯を立てずに「ぱくっ」と唇ではさむようなやりかたなので、私が手を怪我することはありませんでした。

それでも、耳の掃除中に頭を動かされるとうまく洗ってやることができず、時間もかかります。

フードを一粒左手でつまみ、れんの口元にあてながら、右手で耳に洗浄液を流し込み、耳の根元をよく揉みこんでから脱脂綿でふき取るのは、慣れないと大変な作業でした。

おまけに、相棒のちいがやってきて、

「れんをいじめないで！」

とばかりにワンワン吠え立てて邪魔をするので、飼い主にとっても、耳掃除はちょっと苦痛な時間でした。

ちいをなだめて居間へ行かせ、れんは台所に隔離してなんとか毎日、何年もこれを続けました。

そのうちに、れん本人も、ちいもこの行事に慣れて、朝と晩にはおとなしく耳掃除を我慢してくれるようになりました。

ちいのほうは、お風呂場以外での耳掃除など絶対させてくれませんでしたし、お風呂でも、顔のまわりにお湯をかけられるのが大嫌いで、大暴れするので、噛まれないようにすばやく耳を洗ってやらなければならない子でした。

仔犬のころから人には従順で、治療にも協力的なれんのほうが耳の疾患になったのは、不幸中の幸いでした。

もしもこれが本気噛みを躊躇しないちいのほうだったら、私の手の指たちは常に包帯だらけだったかもしれません。

## 外科療法

---

何年経っても一進一退を繰り返し、完治しないれんの耳を診たあと先生は、

「外科療法をしてみませんか？全身麻酔をかけて鼓膜を切開し、中のほうまできれいにする方法です。」

と言いました。

人間の話ですが、娘が小さいころ、慢性の中耳炎を繰り返し、内科療法から外科療法に切り替えたらすっきりと治ったことがありました。

人の場合、全身麻酔も使いませんし、一瞬で鼓膜に穴をあけて中の膿を出してもらいました。娘は乳児だったのでまったく覚えていないと思いますが、ぎゃっと泣いて、すぐにおとなしくなりました。

れんは、フレンチブルドッグにしては細身でイビキもかかず、呼吸器系にも特に問題はなかったのですが、全身麻酔についてのリスクの説明を聞くと、どうしても外科療法には踏み切れませんでした。

切開したとしても、必ず治るかどうかはわかりません、とのことだったので、内科療法を続けることをお願いしました。

血液検査をしながら、少量のステロイドを飲ませ続け、炎症が起きるたびに耳だれの菌を検査して、それに合う抗生物質を処方してもらいました。

ところがれんの耳の菌は、処方された抗生物質にしだいに耐性をつけてしまい、何種類もの抗生物質が効かなくなり、選択肢が少なくなってゆきました。

オゾン化オイルを洗浄後の耳に入れたり、一か月間効果のあるという点耳薬も試みましたが、大きな効果は出ませんでした。

そして発病から4年が過ぎたころ、先生は

「念のため、大学病院で腫瘍の検査をしてみましょう。軽い麻酔も必要ですが、切開するための麻酔ではなく、ちょっと動かないようにして、写真を撮るだけですから、それほどリスクはないですよ。」

と、精密検査を勧めてくれました。

大学病院は平日しか検査してくれませんか、予約診療でもとても時間がかかります。

仕事を休みにくい環境ではありましたが、何年もれんの耳につきあってくださった先生が一生懸命勧めてくれるので、大学病院への紹介状をもらい、検査の予約もお願いしました。

## 精密検査

---

このとき初めて、大学病院の腫瘍科で、あとで思い返すとれんの相棒であるちいの心臓のガンを見つけてくださった先生にお会いしました。

検査用の麻酔から覚めたれんは元気に戻ってきましたし、検査の結果もすぐに知らされました。

れんの耳の奥に腫瘍は見つからず、繰り返す炎症の原因は特定できませんでしたが、ガンではなかったことがただ嬉しくて、かかりつけの病院に戻りました。2016年の初夏のことでした。

この年の末、甲状腺の検査でも以上は見つからず、翌年の夏にちいの闘病が始まっても、れんの病院通いは続いていました。

## ちいを見守るれん

---

2017年の夏、ちいが大学病院で末期ガンの宣告を受け、ちいの闘いが始まりました。れんはいつも、そばで見守っていました。

ちいは、週に一度大学病院でガンの写真を撮り、ピンポイントで放射線をあててもらいました。先生は末期なので積極的な治療はできない、と言いましたが、私の希望を聞いてくださり、最後まで放射線治療を続けてくださいました。

お腹と胸の中、そして心臓を包む袋（心嚢）の中にも水がたまり続け、心臓や肺を圧迫します。これを抜いて呼吸を楽にしてもらうとちいは、手からならば少しだけご飯を食べるようになり、三日後にはまた、水のせいで呼吸が困難になりました。

酸素ハウスを借りて、苦しい時には自分で中に入って寝ていましたが、大学病院の合間にかかりつけの病院でも水をできるだけ抜いてもらい、息ができるようにしてもらいました。

かかりつけの先生は、手の施しようがなくなったちいに、「高濃度ビタミンC点滴」という方法も勧めてくれました。海外では一般的なガン治療法であり、日本の大学病院では推奨していないそうですが、一番良いケースでは犬のガンが消失したとのことでした。

こんなふうにちいが過ごしているのを、れんはずっとおとなしく見守っていました。ちいだけが家族の手からおいしそうなお飯をもらい、れんはうらやましそうに見ていました。

ときどきちいの残り物をもらい、ちょっとれんの体重が増えてしまいました。

ちいが三日おきに病院へ連れて行かれ、帰ってくるまでの長い時間をれんは家でおとなしく待ちました。

もともと活発に動き回るのが大好きなれんが、ちいに迷惑をかけないように気を使いながら静かにボールで遊ぶ姿は、ちょっと可愛そうでした。

ちいは散歩にも行けなくなり、れんだけの散歩も、ほんの短い時間になりました。

## ちいからの贈り物

---

ちいはその秋のある日、真夜中に家族とのお別れをしました。

あまりに静かな最期だったため、そばでぐっすり眠っていたれんは、ちいの旅立ちに気付かず、そのまま朝を迎えました。

居間の日当たりのよい場所で静かに眠っているちいが、朝なのにちっとも起きようとしないうちに気付いたれんは、

「ちいちゃん、ちいちゃん起きて、起きて！」

と、ちいに向かって吠えました。

私はいれんに、ちいはもう起きないんだよ、と言い聞かせ、れんは吠えるのをやめて静かにちいを見つめていました。

ちいがガンの宣告を受けたころから、れんの耳は快方に向かい、

「耳の奥の赤みもありませんね。ちいちゃんが大変なときですから、このままれんちゃんの耳が維持できるといいですね。」

と、かかりつけの先生は言いました。

ちいが亡くなってからも、れんの耳は落ち着いていました。

「れんの耳の悪いところを、ちいが全部持って行ってくれたのかな？」

こんな風に考えたくなるほどでした。

その頃ちょうど、かかりつけの病院に鍼治療のできる先生がときどき来るようになり、れんの耳も診てもらいました。

その先生に、ちいの闘病が始まってかられんの耳が落ち着いてきたことを話すと、

「興奮しやすい性格の子の場合、気持ちを落ち着かせることで体や耳の炎症がおさまることもあります。」

と言って、鍼治療とお灸を何度かしたあと、副作用も少なく、効き目のありそうな漢方薬を勧めてくれました。

今は、その先生も他の仕事が忙しくなり、かかりつけの病院には来なくなってしまいましたが、漢方薬（抑肝散加陳皮半夏）だけは今も処方してもらい、れんの耳の様子を見ながらほんの少しだけ飲ませ続けています。

今日も窓のそばで日向ぼっこをしているれんに、ちいが空の上から

「耳が治って良かったね。れん。」

と、やさしく話しかけているような気がします。